

# people

やま もと み え  
山本美恵

(きぼうのいえ看護主任)

山谷でホームレスの人たちを収容する  
ホスピスケア施設「きぼうのいえ」。  
看護主任として尊厳ある最期を看取る



山谷の人たちも最初は  
遠巻きに見ていましたが、今では  
受け入れてくれています

やまもと みえ 1958年、長野県生まれ。東京都立豊島看護専門学校卒業。心臓血管研究所附属病院、新赤坂クリニックを経て、医療図書の編集者となる。2001年、「ホスピスケア施設を設立したい」という夢を持つ山本雅基さんと出会い、結婚。2002年、「きぼうのいえ」をオープンした。



**夫** とともに建てた「きぼうのいえ」で、看護主任として働いています。ドヤ(簡易宿泊所)が密集する労働者の町、東京・山谷にあり、路上生活の末、病気で社会復帰を絶たれた人や末期がんの患者さんが入居しています。

最初からこういう道を歩むとは、考えていませんでした。高校時代、天逝した親友の遺志を継ぐようにして看護師になり、病院の機関誌を発行する仕事に携わったのがきっかけで、医療関係の出版社に転職しました。

私が大きく変わったのは、その恋人の事故死からでした。あとを追って死のうとしましたが、できなかつた。でもそのうちに、「残された日々はおまけの人生だから、自分の思った通りに生きてみよう」という気持ちになれたんです。やがて、人間が死を受け入れるとはどういうことを考えるようになり、大学が社会人向けに開設しているホスピス・ボランティア講座に通い始めました。そこで夫となる山本雅基と出会いました。

**地** 「きぼうのいえ」を、私たちは在宅ホスピスケア施設、と名づけています。在宅ケアの集合体という意味です。入居者の半数以上は路上生活の経験者。路上生活の人々は栄養の偏った食事や過酷な労働の無理がたたり、肝臓病や糖尿病、がんを患う人が少なくありません。病院に入院しても退院後に介護する人がいない人や、帰る場所がなく、「路上死」を迎える人もいます。「きぼうのいえ」ではそうした人々に入居していただき、ひとつ屋根の下で暮らしています。私たち夫婦も施設の棟続きに住んでお世話しています。

スタップ、ボランティアと一緒にシーツやおむつ交換、清掃、介助などを行っています。毎日さまざまな「事件」が起きます。社会に溶け込めず、協調性のない人たちもいますし、暴れて自分の汚物を撒き散らす人、食事が気に入らないといつて怒鳴る人、入居費を使い込んでしまふ人もいました。生活保護費から家賃などの経費を出してもらい、運営に充てているものの、毎月赤字。私たち夫婦の給料は二人合わせて10万円位だっています。不足分は寄付金などに頼らざるをえませんが、死にもの狂いでがんばっている、不思議と救いの手が差し伸べられ、何とかなってきました。最初は遠巻きに見ていた山谷の人々も、今では受け入れてくれています。

オープンして一年半で、6人の入居者を看取りました。病院に勤めていたとき、人の死は心電図上の無機質なものでしたが、ここは違います。痛みを取る以外、延命治療は行いません。体に管を付けることなく、人間らしく自然に息を引き取ります。つい先日亡くなった人はすつと心を閉ざし、私たちの介護をこぼみ続けたのですが、最後の3日間だけ、背中をさすらせてくれました。本当に苦しかったんでしょね。「ありがとう」という言葉を残して亡くなったときは、私のほうが「ありがとう」という感謝の気持ちで胸がいっぱいになりました。

さまざまな事情を抱えて山谷に辿りついた人々との付き合いは難しく、まだ理解に苦しむことばかりです。でも、入居者は家族と同じ。人間として尊厳のある最期を迎えてほしい。将来は診療所や、第二の「きぼうのいえ」を作りたいねって夫と話しているんです。まだ夢物語ですけどね。(笑)